

【2009年度愛知淑徳大学文学部講演会：記録】

小さな町の元気な図書館

講演者：前 壽則*
(*Hisanori MAE*, 鯖江市図書館長)

講演記録：木幡 智子**
(*Satoko KOWATA*, 愛知淑徳大学大学院)

概 要

本講演は平成21年度第1回愛知淑徳大学文学部講演会として5月19日に愛知淑徳大学で行われたものである。

本稿は、福井県鯖江市という人口6万8千人の小さな町の図書館について、講演者の実体験を交えた講演の記録である。財政的に苦しい状況の中にあっても諦めず、日本一の図書館を目指して躍進する鯖江市図書館の理念と現在行われている事業、事業を支える市民団体の活動について述べられている。

また、9章以降には講演後に講演記録者らが鯖江市図書館を訪問し、インタビューで聴取した内容を基に補足を行った。

* 本公演は、2009（平成21）年度第1回愛知淑徳大学文学部講演会として、5月19日に愛知淑徳大学において行われたものである。

1. はじめに

福井県は所在すら認知度が低い。そんな福井県にある鯖江はめがねのフレームで有名な中小都市である。吹けば飛ぶような福井県ではあるけれど私は鯖江を全国的に有名にしたいと思っている。今回の講演では、最先端の図書館の取り組みについて取り上げるのではなく、普通の図書館で働く意味について「小さな町の元気な図書館」というタイトルで話をする。

人は皆がみんな一流になることはできない。地味な生活の人が多し。そんな中、女性は高学歴、高収入、高身長、いわゆる3高と言われる人と一緒になりたいと願う。そうすれば幸せになれると思っている。しかし、夢は見るけれどもそういう結婚というのはなかなかできない。

逆に、そういうことに心をとられると失うものがある。人の外に付けられた条件は状況が変わると吹き飛んでしまうことがある。本当に高学歴、高収入、高身長、それが人を幸せにするものなのだろうかということ、一生に一度、まじめに自分自身を疑ってみる必要がある。

図書館についても同様で、良い図書館に勤務することは素晴らしいことだろうが、ただ、その職員になっただけではプライドと傲慢さが増すだけである。それだけでは自分の人生にとって何の意味もない。

「うちの館長は囑託でやる気がない。だから私はこんなに熱心に図書館のことを思っているのに何にもできない」、「図書購入費が少なくて欲しい本も買えない」、「建物が古くて狭いからこんな図書館があったってしょうがない」、「市民の程度が低いから図書館の利用が少ない」などと考える図書館員は結構いるだろうが、それは被害妄想である。「大人になるということは諦めを知ることだ」という言葉がある。自分の思ったことが実現しないつらさというのは、社会に出ればもっと悲惨で、図書館に限らず願ったことはひとつも実現しないというのが現実である。

2. 市民のための図書館

鯖江は人口7万足らずの町で、財政は230億くらいしかない非常に小さな貧しい町である。私が司書として図書館に勤務を始めたとき、職員は囑託館長1人と本庁から来た管理職の副館長1人と、先輩の女性司書2人、そして私、計5人だった。図書購入費は500万円、蔵書数は3万冊、年間貸し出し冊数は10万少しで、市民一人当たりでは2冊程度だった。コピー機なし、コンピュータもなし、手書きのカード目録を手作業で作成していた。良いところはひとつもなかった。まずは蔵書を増やそうということで、寄贈を募った。それから手書きのカード書きが楽になるようワープロを買いたいということになり、10万足らずの予算を要求したが、却下された。蔵書が増えることは一番市民を喜ばせることだからと、市民のことを思って頑張っているのに、なぜ財政課は判ってくれないんだと悲しい思いをした。そこで、図書館を管轄する社会教育課にクレームをつけたところ、社会教育課の課長は怒ってこういった。「今年つかなかたら来年また要求すれば良いじゃないか。来年つかなかたら再来年要求すればいいじゃないか。自分の望んだことが一回けられただけで、それで文句を言ってあきらめるというのなら、おまえの言っている市民のためという理想は嘘だ。甘ったれるんじゃない。市民のためにやっていることならば、諦めなければいい。」これがきっかけとなり、先輩司書2人と鯖江の図書館を福井県一にしよう、日本一にしよう、と決意した。理解者がなくても、予算がなくても私たち3人でこの鯖江の図書館を日本一と呼ばれる図書館にしようと、その時決めた。人が選択を迫られるとき、あきらめるという道とそれでも望み続けるという道の二つの道がある。

3. 具体的な活動

日本一の図書館にするために、選書、レファレンス、リクエスト、予約、貸し出しなどにつ

いて事細かに決めた。利用者が来たら明るく笑顔で接する、利用者からの質問には徹底して、もういらぬ、と言われるくらいまで資料を探した。図書館員として基本的なことをきっちりやって、その上で図書館と市民とを結び付ける手だてを考えていった。市役所のロビーには人が集まるから、ダンボールに本をつめて持っていき、貸し出しに行った。夏休みの宿題コーナーを作ったり、中心部から少し離れたところにかわだ文庫を作ってもらったり、石に絵を描いてもらって展示したり、いろいろな企画を行った。

図書館の基本的な業務を行ったうえで事業を行い、市民にアピールをする一方で、説得を行った。市の主人公は市民である。市民の要求で市は動く。市民が図書館を充実しろ、と言えば図書館は充実する。市民がデモや座り込みを行って「図書館を充実しろ」と言えばすぐに図書館は充実する。それは市の行政の宿命だ。しかし、図書館を利用する市民は大概はおとなしいので、デモやストライキを起こしたりはしない。市民が動かないならば、市長、助役、議員、教育長など市を動かしている人を説得する。

文化的な市民の顔というのは図書館に現れる。鯖江の図書館は今の上では恥ずかしい、と市長、助役、議員、教育長に話して回った。また、町にある団体、商工会や文化協議会、ロータリークラブなど、人の顔を見たら「図書館は大切なんです」と説いて回った。このとき、熱弁をふるうのではなく同情を買うように言うといい。また、図書館協議会では実情を話した。こういった地道な活動を行っている、少しずつ人が変わってくる。私は陳情書を議会に持っていき、理想の声をあげ続けた。昭和64年には図書館友の会を作った。

4. 図書館友の会

この図書館友の会は会員一人当たり年間500円の会費を徴収することで活動を行っている。どこか遠くへ行こうと思ったとき、多くの人

JRのことを考える。それと同じように何か調べたいと思ったとき、友の会結成前には図書館のことを考える人というのは多くなかった。図書館友の会の活動によって鯖江に図書館があることが知れ渡り、市民に開かれた市民の図書館になることができた。友の会は図書館と市民との間に入って橋渡しをするボランティアである。使用用途の限られたいわゆるひも付きのお金はもらわず、会費のみで活動をしている。友の会の主な活動は12ページ立ての友の会たよりの発行、土曜日の夜に子どもを集めて楽しむ子どものつどい、講演会、宿題コーナー、絵画教室など、市民が楽しむことは何でもやった。

5. 現在行われている事業

今では10人の図書館員がおり、4500万円の図書購入費がある。昭和54年に建築された図書館は新しく、大きな図書館に移された。

鯖江市図書館では図書館がバスを出して幼稚園・保育園の園児を図書館に招待する事業（「本との素敵な出会い」）を行っている。毎年続けることで、鯖江市の住民は一生に一度はもれなく図書館に足を運ぶことになる。子どもに図書館で楽しい思いをさせることで喜びの種をまく。自宅に帰ったら子どもは楽しかった思いを家族に話す。そうすると、それが大人に伝わり、次は家族連れだって図書館を訪問することにつながる。次に一緒に図書館へ行った家族が町内の集まりに参加したときに、例えば草刈りをしながら図書館へ行って楽しかった、という話をする。図書館で嬉しかったことはどんどん広がっていく。そして鯖江では図書館の悪口が言えなくなり、応援団が町にたくさん増え、図書館が身近になっていく。

また、学校に要望があれば、こちらから訪問する。子どもの読書離れが嘆かれていたら、授業時間内にブックトークを行い図書館員が学校を訪問する。司書教諭はいても他の業務が忙しくて学校図書館が利用されていないという話

があったので、現在は週2回、鯖江市図書館の司書が学校を訪問し、図書整理の仕方を教えたり、本の紹介を行ったりしている。

6. ライブラリーカフェ

子どもたちは学校単位でまとまっているので、割と円滑に図書館利用につなげることができる。難しいのは大人たちである。鯖江には大学がないので、大学で行われているような最先端の学術情報が入ってこない。しかし、なんとか学術的な話を聞く機会をつくることのできないだろうか、と友の会の会長が提案をした。そこで、コーヒーを飲んでお菓子を食べながら最先端のお話を聞く会を開こうということになったが、お金がない。友の会の人々が大学の先生のところに出向いて、「私たちはボランティアでやっているからお金はないけれど、講演に来てくれないか」と頼んだ。私たちが思い描く図書館像に賛同してくれる人に来て欲しいという思いもあった。その結果、ほとんどの人がタダで講演に来てくれることになり、発案してから2ヶ月後、ライブラリーカフェがはじまった。第1回は地元のお医者さんに遺伝子のことを話してもらったが、70名の参加者が集まり盛況だった。現在は50回を超えており、福井県立大学と提携して行われている。福井県立大学ではこのライブラリーカフェで講演をするということがひとつのステータスのように言われ、講演を行いたいという人が多く待機してくれている。

7. おわりに

図書館では重要な人類の知的資産をきっちりと蓄え、それを十分に市民に提供する。さらに市民のための図書館として、市民には親切に最善の力を尽くして奉仕するというのが基本である。その上に鯖江市内に喜びの種をいっぱいまいていく。そうするとそれがいつか実り、鯖江市民の心が豊かになるのではないだろうか。豊かにならないかもしれないが、そうなることを

私は信じてやっている。最初に3高の話をしたが、そういう外的な、人間に外側から張り付けられた利点ではなく、現実をしっかりと見て、人間にとって何が大事かということをしっかり考えていかなければいけない。今日より明日、明日より明後日、明後日より明後後日。そうやって自分自身の現実を乗り越えていくということが何より大事だと考えている。最後に夏目漱石の芥川龍之介と久米正雄にあてた手紙(大正5年8月21日付)を読む。(引用文省略)

8. 質疑応答(要約)

Q: 学校と公立図書館との連携について、鯖江市図書館の意識はどうか。また、どのようなことが行われているのか。

A: 学校図書館、図書室は本来は司書教諭を置いてきちんと毎日いる人が業務を行うのが本来の姿であり、我々がそこに出かけていくことは本来はおかしいことだと考えている。そういうことをすることによって、学校も力が入らないかもしれないし、危険性は多々あると思う。ただ、現実としてにっちもさっちもいかないということなので、少しお手伝いをさせていただいている。それと学校の図書部会の先生、読み聞かせに来ているボランティアの人などと話し合い、図書館で講習会を開催したりしている。しかし、これは本来の図書館業務ではないと考えている。

Q: 友の会の果たす役割は大きいと思うが、どういった人が集まっているのか。

A: 高校の先生が多い。それと図書館のカウンターに来られる人たちで、日ごろ会話をする中でこの人ならやってくれるという人を説得する。

Q: 雑誌の購入に関してどのようにしているのか。

A: 図書購入についても同じだが、図書館友の会の中に本を非常に沢山読んでいる方が何

人かいる。その人に声をかけて、選書の手伝いをしてもらう。毎週見計らいが届くので、それを全部、3人の人に見てもらい、あったほうが良いものをチェックしてもらう。そのあと最終的には我々職員が決定する。雑誌についても年に一回、だいたい1月頃に何人かに本屋に行ってもらい、どういものがあるのかを見てもらい、意見を聞くようにしている。また、日ごろから友の会の事務局と話をする機会を設け、さらにカウンターでの声をくみ取ることで、市民の声を取り入れるようにしている。

- Q：市民から図書館の事業は税金の無駄遣いだと言われた場合にはどう対応していくのか。
- A：確かに鯖江市の場合、他の課は非常に予算を削減されているが、図書館だけ図書購入費や人員を増加している。しかし、財政課が無駄遣いだと判断すれば、やめることになる。現在は市民のための図書館を作ろうとしていて、その活動を市民が許している状況である。だから、図書館が努力をせず、流行らないなら図書購入費は半分になるだろう。
- Q：図書館に来られない人への対応はどうしているのか。
- A：鯖江はコンパクトで小さい町なので、一番遠いところでも車で15分で図書館へつけるようなところで、コミュニティバスというのを市が運営している。このコミュニティバスが図書館に停まるように工夫してもらっている。それと、遠隔地文庫を作って、図書館で登録した本を文庫へ持って行って、そこでその地区の人々に貸し出している。本当はあちこちに図書館があるというのが最初の狙いで、遠く離れたところにある文庫をいつかは図書館分館にしないとだめだと少しずつ働きかけをしている。

(講演会記録はここまで。)

9. 記録者らによる鯖江市図書館訪問

講演後、鯖江市図書館の取り組みについてさらに聞き取りを行うため、講演記録者ら愛知淑徳大学院図書館情報学コース院生4名(木幡智子、江良友子、服部繁彦、西村飛俊)による鯖江市図書館訪問を行った。訪問日は2009年9月6日(土曜日)である。講演者である鯖江市図書館長前氏と図書館友の会から岡田事務局長他1名にご対応いただいた。

9. 1 鯖江市の特徴

福井県にある鯖江市は人口約6万8千人の小都市である。地場産業には眼鏡フレーム、漆器、繊維があるが、かつてのような勢いはない。しかし、大企業に依存していないため、昨今の不況による経済的な影響は少ないという土地柄である。

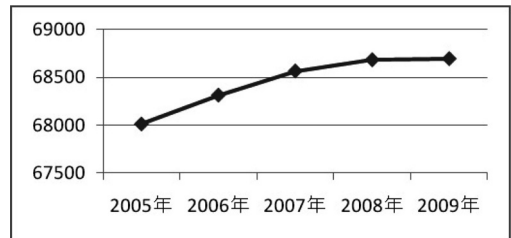


図1 鯖江市の人口の推移¹⁾

鯖江市の人口は増加率に減少はみられるものの、少子化が問題化している現在においても増加を続けている。医者、学校、道路など生活に必要なインフラは十分整備されており、僻地といった地域が存在しない。その上自然も残されており、東洋経済の行う「住みよさランキング」では比較的上位にランキングされている。

現在の鯖江市図書館は1997年に視聴覚ライブラリー、映像情報館を併設した「文化の館」の一部として開館した。

9. 2 鯖江市図書館の課題解決支援事業

新しい公共図書館の取り組みとして多くの公共図書館がビジネス支援事業を始めているのと同様に、鯖江市図書館でもビジネス支援用のコーナーを設けている。そして図書館から1時間ほどのところに福井産業支援センターがあり、これを身近に使えるよう、窓口となって紹介を行っている。ただし、上述した通り、鯖江市では不況による経済的な打撃が少ないため、このサービスに対するニーズはそれほど大きなものではない。

9. 3 鯖江市図書館による地域課題への取り組み

鯖江市図書館がより大きな地域課題だと考えているのは地域社会全体の教育力の低下である。これに対処するために地域住民によるボランティア（図書館友の会）と連携して公共図書館を使ったアカデミックな講座であるライブラリーカフェを、図書館1階に敷設された喫茶室を使って毎月1回開催している。福井大学の教授、地元の伝統工芸師、研究者、動物園の飼育員などが講演に訪れている。

ライブラリーカフェには宣伝をしなくても人が集まってくる。内容によって参加者数は変わってくるが、適正規模を35人と試算しているのにも関わらず、盛況な時には70名の参加者が集まってくる。

鯖江市では市民の学習として公民館活動も活発に行われている。しかし、公民館では方法的なものが多いため、図書館でのアカデミックな学習とは性質を異にする。本質的な内容を扱い、本の利用と結びつけるための講座を図書館では行っている。

鯖江市図書館では全人格的に人を育てる場として公共図書館が運営されており、前壽則氏には「図書館は市民によって作られる」という理念がある。また、図書館の人の問題に関して前氏は「図書館員は委託ではなく直営でないとい

けない。専門職としての知識、経験を持っていないと地域の教育力をあげることに貢献することはできない」と言う。

9. 4 図書館友の会

図書館友の会の会員は50～60歳の層が多く、現在会員数は約250名である。友の会は「たより」の発行を主な仕事とし、ライブラリーカフェでの講演についてもたよりで報告を行っている。友の会は図書館と市民の仲立ちとしての役割を持つが、一方で良い意味での圧力団体としての側面も持ち合わせている。これは図書館が市民にとって良いサービスをしているかどうかの見張り役という意味である。一方、図書館側はボランティア担当の司書を4人割り当て、協働で活動を行っている。

9. 5 鯖江市図書館の理念

前氏によれば図書館は健康施設であるという。何かあればまずは図書館で相談をすることができる。また、図書館は良い環境で情報を読むことができる場でもある。図書館がなければ困る人も多いだろうということである。

鯖江市図書館は「排除」というルールを設けていない。具体的には受験生による席取りやホームレスの問題である。前者については試験期間に会議室を開放し、生徒をそちらに入れることで十分な席を確保している。学生も大事な市民だから、排除しない。席が必要だというならば、どこにでも席を作る。後者についてはルールを守るよう辛抱強く言うとそのうちしたがってくれるようになる、ということだ。

9. 6 視察訪問のまとめ

鯖江市図書館の建物内部は開館してから12年たつとは思えないほどきれいだった。なぜこのようにきれいなのかを前氏に聞いたところ、鯖江市図書館を愛しているという方が、入札で清掃会社が変わることがあっても、会社を転々と

しながらずっと掃除をしているのだという。これは図書館応援団の姿を象徴した話として非常に印象深いものであった。

図書館を側面から支援する団体として市民の力を得ていることが、鯖江市図書館が元気である理由の一つであろうと思われる。また、前氏は発言力のある人を大切に、「図書館親衛隊」を着々と作ってきた。「市民のための図書館を」というコンセンサスを築くことは一朝一夕にできることではないだろう。しかし、本当に必要なことならば望み続け、諦めないということから生まれたさまざまな取り組みは、小さな町の図書館であっても多くの可能性を持つことを示しており、勇気づけられる。

しかし、鯖江市のような活気ある取り組みを他の自治体がすぐに取り入れることができるのかというと、それは難しいと前氏は言う。鯖江の自治体規模は6～7万人だが、このくらいの規模だと行政の意思統一がうまくいく。しかし、自治体規模が大きくなると、鯖江と同じような事業を行うことは難しいだろう、ということである。

鯖江市図書館の今後の課題としては、館長の人となりに頼っている部分が多いため、将来を見据えて人を育てないといけないということだ。前氏は理想を掲げて30年図書館業務に携わってきた。この人脈を受け継ぐのは難しいことであるが、「小さな町の元気な図書館」として今後も発展を続けていかれることを祈念する。

講演者略歴

1952年生まれ。南山大学哲学科卒業。

1983年 鯖江市役所入庁（図書館司書）。

2008年4月～現在 図書館長。

注

- 1) 鯖江市政策推進課, “鯖江市人口”.
<http://61.194.118.153/pageview.html?id=3932>, (参照2009/12/7).